

性はグラデーション ～わたしたちのせい（性・生）を考える～

寺松みどり

1 はじめに … なぜこのテーマを選んだのか

本レポートのテーマは、昨年（2013 年）9 月に、私が勤務する岐阜市女性センター（以下、女性センター）¹において、「“人間と性” 教育文化センター²（以下、市民団体）」の協力を得て開講した＜講座の名称＞である。

2 回連続講座で、1 回目は、自分の性について考え、その上で「セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）」が直面する問題や「性はグラデーション」の意味を知り理解することを目的とした。2 回目は、当事者を招き、交流会という形式で、体験談や感じていることを聞き、さらに理解を深める、という流れをとった。

本レポートは、私が「セクシュアル・マイノリティ」支援者の一人として歩み始めるきっかけとなった市民団体との出会い、そして『せい（性・生）』を通しての気づきやエピソードをもとに、「人権」「男女共同参画社会」をみつめなおし、これからの私のやるべきことについて書き記したものである。

女性センターは、岐阜市における「男女共同参画社会の実現を推進するための拠点施設」である。

現在、小さなルームのようなものまで含めると全国に 300 ヶ所以上ある、いうなれば「男女共同参画センター」のことである。

この市民団体は、女性センターを支えてくださる団体の一つで、随分と前からご縁があった。私は一度この団体の例会に参加し、直接会合風景を拝見したいと常々から考えていた。ふと、幼い頃を思い起こせば、確かに女の子のような顔立ちやしゃべり方をする男の子がいた。逆に男勝り、といわれる女の子もいた。成人してからは、「人を好きになるという感情が全く解らないのよ」と、友人から悩みを打ち明けられたこともあった。

だからと言って、私は特段気にかけたことはなかった。その人その人のパーソナリティだと思っていた。というより性に対してあまり興味がなかった、というのが本音かもしれない。

そもそも、私は女性センターの所長として、男女共同参画講座などで「互いの性を理解し、互いに尊重する意識の形成をしましょう！」と、何度言ってきたことか…。

確かにそれで間違っていないのだろうが、この＜互いの性＞を語る時、実は体の性である“男性”と“女性”のイメージしか存在していなかったのではないか…。

「セックス」「ジェンダー」「セクシュアリティ」について、本当に理解できているのだろうか、と自問自答することがしばしばあった。

★この続きは『2014 年度「日本女性学習財団賞」受賞レポート集 学びがひろく vol.4』で！